

社会学者

上野千鶴子さん

*12月9日～1月19日

帝国の慰安婦

情事の真実

- 帝国の慰安婦（朴裕河著・2014年）朝日新聞出版
- 日本占領とジエンダー（平井和子著・2014年）有志舎
- パンパンとは誰なのか キャッチという占領期の性暴力とG-との親密性（茶園敏美著・2014年）インパクト出版会

火傷を負う「慰安婦」問題

日本と韓国とのあいだに刺さった脱けない棘……それが「慰安婦」問題である。1991年の金学順さんの証言から20年余。事態は当時より悪くなつた。そこに再び火に油を注いだのが、昨年の朝日新聞「慰安婦」報道検証と謝罪である。日本人が「ふつこうな眞実」を忘れないと思つてゐるところに、たとえ報道検証という形であれ、この問題が国民世論の争点に浮上することそのものは歓迎したい。なぜなら問題はこじめられているのに、解決の要請は待つたなしだからである。

この問題について避けて通れない書物の日本語版がついに出た。朴裕河さんの「帝国の慰安婦」である。韓国では元「慰安婦」の名譽を傷つけたとして出版差し止め訴訟が起きた論争的な書物である。前著「和解のために 教科書・慰安婦・靖国・独島」（平凡社）にわたしは「あえて火中の栗を拾う」と題した解説を入れる」ことき本である。書き手も読み手も火傷を負わずにはいない。朴さんは、「なかで、日本人にとつても韓国人にとつてももっとも触れられたくない過去、忘れない事実について書く。それは戦前、朝鮮半島のひとひどが「日



■ 東京都三鷹市の大沢の里水車営業所で、徳野仁子撮影

本人であった」こと、もっと正確に言えば、むりやり「日本人にさせられたこと」である。「祖國」だった日本が「敵国」に変わった韓国の公式記憶を逆なし、植民者であつた日本の後ろめたさを懺らせる。「慰安婦」とそれを動員した人々は「対日協力者」だった。それも「強制的」な。

同じことを占領期の日本もまた征服者たちにした。「自分の女」を米軍兵士に差し出したのだ。平井和子「日本占領とジエンダー」と茶園敏美「パンパンとは誰なのか」という2冊の注目すべき歴史研究は、日本人が忘れない過去をていねいに掘り起す。ナショナリズムのもとでは相手

が「敵国」に変わらない限り、日本人「慰安婦」も、「占領軍慰安婦」も「パンパン」も性暴力被害者として名のりをあげることができない。

20年の間に付け加わった要因は、アジア女性基金と支援団体の果たした役割への評価

大切なのは、「慰安婦」とはいったい何だったのかという歴史的事実のほうだ。それを知りたければ日本軍「慰安婦」問題webサイト制作委員会編の「Q&A『慰安婦』・強制・性奴隸 あなたの疑問に答えます」（御茶の水書房）

である。韓国側の不信感と日本側の政策の失敗は双方に深い傷を残した。若い研究者、熊谷奈緒子による「慰安婦問題」は、目配りのよい好著である。91年には学生だった歴史から見れば、この20年の歴史はこう見えるのか、という感慨がある。アジア女性基金の当事者もまた、「デジタル記念館 慰安婦問題とアジア女性基金」（青灯社）で自ら情報発信している。

それにしても、「慰安婦」がいかに報道されたか以上に

うえの・ちづこ 東京大名誉教授、認定NPO法人「ウィメンズアクションネットワーク」理事長。「おひとりさまの老後」など著書多数。

筆者は上野千鶴子、福地茂雄、綿矢りさ、松家仁之の4氏です。

が役に立つが、本書に述べられた事実とSAPIO編集部編の「日本人が知つておくべき『慰安婦』の真実」（小学館）とのあいだにある、とうていあいられない歴史認識のギャップを目の前にすると、20年前には抑制された夜郎自大なプロパガンダ本が大手の出版社から刊行される時代の保守化に気が滅入る。朝日新聞社は社内改革の方針を掲げたがそのなかの「多様な言論を尊重します」という項目がたんに「保守派の言論にも紙面を割きます」という、中立を表した「両論併記」にならなければよいが……と憂慮が先に立つ。どの新聞媒体にとっても、他人事ではないだろ